みんなの文芸

引間豐作選　投稿数26句

ドライブや春の量だけ窓開く　金崎　浅見冨美子

(評)　初句も座五も解りやすい語彙なのに、中七の春の量との言葉によって句の厚みが全く違うものとなった。夏の市街地は排気と舗装の照り返しに閉めきっての冷房、郊外では全開にして風を満喫。秋のドライブでは行く先先の風景観賞もガラス越しが多いが冬ともなれば、外界の風物はどうであれ閉めきっての暖房攻めにあう。ならば春はどうであろうか。行く先々での風光によって適当に調節され、車内の温度と景色如何によって窓の具合も変化する。掲句ようにその日の時間帯と場所によって、開け閉めが春の量だけとは利発な言葉の発見とおもう。

ワイングラス傾けすかす春の彩　下日野沢　小川　もと

一服の茶筅の先に春立てり　三沢　新井　民子

日脚伸ぶただそれだけの語に温み　皆野　大沼シヅ子

冬帝の懐にある暮しかな　下田野　中田　久恵

葉牡丹の渦を緩める日ざしかな　三沢　真下　杏子

杉木立ち墨絵に仕立て寒月光　金沢　青木冨佐子

静けさの山は芽吹きの気配かな　下日野沢　佐藤　清子

命ある日々を重ねむ福寿草　下田野　藤原　道男

武甲嶺を望む日だまり水仙花　三沢　長谷河ソノ

大寒やほろとこぼるる艶ばなし　下日野沢　高山　ユウ

ちぎれ雲急ぎぬ遙麦芽のび　金崎　設楽　武子

福寿草はっと気付きて愛らしや　皆野　塩田　千代

中田國太郎選　投稿数13首

亡き夫の法要終へて安堵せり立春の風音残し過ぐ　金崎　山田　雅子

(評)　節分も過ぎると、暦の上では立春となるが、自然の営みは、まだまだ冬の寒気が残る。「早春賦」に「春は名のみの、風の寒さや」とあるように、風の寒さが身に沁みる。亡きご主人の法要も済み、がらんとした家の中で、寒さの残る風音を一人で聞いている作者の心情が、結句の「音残し過ぐ」に込められている。その風音の中に、過ぎし日の思い出が浮かび哀切な響きがある。ただ、この歌は、立春の風音に焦点を絞り表現した方が、読者の心に沁みる歌になると思う。新井作蘭玉の懐かしさ。真下作白毛に哀しさあり。新井作、塩田作早春の息吹きあり。

松引いて繭玉作り供えたり妻と昔を想ひて食す　皆野　新井　茂

よちよちと迷い来てより十余年愛犬クロも白毛増えたり　三沢　真下　杏子

木の陰に秘かに咲きし節分草季節の便りするが如くに　三沢　新井　民子

妹の家に伺い卓上に臘梅の花息吹き満ちたり　皆野　塩田　千代

化粧せし己を美しと幾度も自惚れて見る初鏡かな　皆野　笠原三江子

初売りの直売所めがけ真先に自慢の葱を朝風切って　皆野　金子善次郎

人生の礎なりし年輪に悲喜こもごもがありていとしき　皆野　新井　愛子

霜の朝外のかわやに行きし時凍りつくよな犬の声する　上日野沢　四方田利男

集団の就職時代を反映す「あゝ上野駅」の名歌手の逝く　三沢　新井　叶子

元日に娘二家族恒例の集まり遅く早帰りゆく　皆野　吉岡　ヨシ

俳句・短歌を募集

作品には、ふりがなをつけ、住所・氏名を明記して企画課へお寄せください。

8日必着

1人1句、1首に限ります。